

| | |
|-----------|--|
| 氏 名 | 秋田 万里子 |
| 学 位 の 種 類 | 博士（文学） |
| 学位記の番号 | 甲第223号 |
| 学位授与年月日 | 2020（令和2）年3月20日 |
| 学位授与の要件 | 日本女子大学学位規程第5条第1項該当 |
| 学位論文題目 | Idolatry or Creativity: The Ideas of Artistic Creation and Being a Jewish Writer in Cynthia Ozick |
| 論文審査委員 | 主査 大場 昌子（英文学専攻 教授） 副査 スレイター、アン（英文学専攻 教授） 内山加奈枝（英文学専攻 准教授） 臼杵 陽（史学専攻 教授） 広瀬 佳司（ノートルダム清心女子大学 教授） |

論 文 の 内 容 の 要 旨

第二次世界大戦後、1950年代から60年代にかけて、ユダヤ系アメリカ文学は最盛期を迎えた。代表的な作家であるSaul Bellow（1915-2005）やBernard Malamud（1914-86）、Philip Roth（1933-2018）らは、ユダヤ人の疎外感や迫害等をテーマに作品を生み出し、ユダヤ系アメリカ文学の興隆期を支えた。しかしながら、ユダヤ人の同化が進む昨今、ユダヤ人としての民属性を保った文学作品が減少していくのではないかという懸念の声もある。

アメリカ生まれのユダヤ系女性作家Cynthia Ozick（1928- ）は、独創的な手法で衰退しつつあるユダヤ系アメリカ文学界に一石を投じている。前述の代表的ユダヤ系作家たちが、アメリカ社会におけるユダヤ人を社会的・心理的側面から描いてきたのに対し、Ozickはユダヤ律法をユダヤ性の本質とみなし、十戒の第二戒の偶像崇拜禁止とユダヤ人との関係性を作品の主題として扱ってきた。

Ozickの初期作品の最大の特徴は、芸術創造、特に物語の創造を、偶像創造と同一視する点にある。そして、芸術創造の根源である想像力は、偶像を生み出す危険性のある邪悪な力とされている。さらに、ユダヤ教において創造主とは神のみであるため、芸術作品の創造者になろうとすることは神の地位を奪おうとする不敬な行為として描かれている。このように、芸術家（作家）として作品を生み出したい衝動と、それによりユダヤ教の禁忌を犯してしまうかもしれないことへ葛藤が、Ozickの創造意欲の根源となっている。しかしながら、約半世紀に及ぶキャリアの中で、創造行為及び想像力に対するOzickの姿勢も次第に変化していく。本博士論文では、1966年のデビュー作から最新の長編まで網羅し、Ozick作品においてユダヤ人と芸術創造の問題がどのように描かれてきたか論じる。

第一章では、1966年のデビュー作*Trust*を取り上げ、Ozickの「ユダヤ系作家」としての原点を探る。本作は、主人公が非ユダヤ人であることや、テーマや文体にOzickが文学上の師

と仰ぐHenry James (1843-1916) の影響が強く見られることなどから、Ozick作品の中で異質な存在とみなされ、「ユダヤ系文学」として考察されることが少なかった。しかし本作においても、歴史と芸術の対立という、その後のOzick作品の主要テーマを見ることができる。Trustにおいて、歴史は事実・現実世界に基づくものとされているのに対し、芸術は歴史の流れから切り離された世界を創造する行為と定義されている。そして芸術への過度な傾倒は、歴史的事実への見解を歪めたり、現実世界で起きていること、そこで生きる人々の営みへの関心を失わせる危険性があるとされている。このような、芸術と歴史との対立という概念は、ヨーロッパでホロコーストが起きているときに、アメリカで何も知らず芸術活動に没頭していたOzick自身の自責の念に起因すると考えられる。本作は、Ozickがユダヤ人としての民族性を特に意識せず、Jamesの長編のような傑作を目指して書き始めた作品であった。しかし、執筆の過程で、作品の焦点が歴史、特にホロコーストの問題に移っていったことで、意図せず「ユダヤ系文学」として完成する。TrustはOzickにとって、単に作家としてではなく、ユダヤ系作家としてのデビュー作となったといえる。

第二章では、1974年の中編“Usurpation (Other People’s Stories)”で描かれる、「ユダヤ系作家」としての葛藤と自己矛盾について、イェール学派の文学者Harold Bloomの文学理論に対するOzickの姿勢と関連付けながら考察する。Bloomの提唱する誤読理論の主要概念は、若い詩人が先行する偉大な芸術家の影響に飲み込まれず「オリジナル」の作家になるため、先行する作家の作品を意図的に「誤読」し、捻じ曲げるということである。Ozickはエッセイの中でこの理論を、創造主の地位を奪おうとする不敬な概念である捉え、Bloomを芸術上の反ユダヤ主義者として痛烈に批判している。しかし“Usurpation”において、明らかにOzick自身をモデルにしたであろうユダヤ系女性作家の主人公は、Bloomの理論を実践し、偉大な作家の作品を作り替えることで、自身がその作品の「オリジナル」の作家であることを主張する。しかしその挑戦はユダヤ人であるという不可避の事実によって阻止される。この結末は、ユダヤ教における唯一の創造主である神を信仰すべきユダヤ人が、芸術の創造主になろうとすることの不敬さと不毛さを象徴している。そして何より、ユダヤ人でありながら、作家として文学作品という偶像を生み出し続けるOzickの自己撞着を描いている。

第三章は、Ozickが唯一強制収容所を描いた作品 *The Shawl* (1989) に着目し、「ホロコーストについて書く」ことの意味および問題点を探る。*The Shawl*は、強制収容所における非道を描いた短編“The Shawl”と、ホロコースト生存者のアメリカにおけるその後の人生を描いた中編“Rosa”の二編から構成される。短編“The Shawl”は、ホロコーストの直接的な記憶を持たないアメリカ生まれのOzickが、経験者しか書くべきではないという自身のルールを破り、強制収容所内の惨劇を想像力によって描写した作品である。本短編は、ホロコースト生存者である主人公Rosaの極めて主観的かつ狂気に満ちた視点によって語られる。ホロコースト生存者の目を通して恐怖や苦しみを描くことで、Ozickは当時ヨーロッパのユダヤ人たちに起きた悲劇を追体験し、理解しようとするのである。“Rosa”では、ホロコーストを経験していない人々の無知・無関心によって語りを抑圧された生存者が、ペンを取って歴史について書くことにより、声を発することのできる唯一の空間を作り出す。その一方で、書くという行為は歴史を虚構化し、記憶の受容や現実の直視を妨げる危険性もあることが強調されている。このようにOzickは、物語による歴史の歪曲を懸念しつつも、ユダヤ系作家として、作品を通してその集合的記憶を継承していく使命を感じ、ホロコーストについて描き続けるの

である。

第四章では、夢想家のユダヤ人女性Puttermesserを主人公にした連続する中短編集 *The Puttermesser Papers* (1997) を扱う。本章では主に中編“Puttermesser and Xanthippe”に焦点を当て、人間による創造行為の限界について論じる。本中編では、Puttermesserが、Xanthippe という名のユダヤ伝承の土人形ゴーレムを作り出し、それを使って犯罪に満ちたニューヨークを地上の楽園に作り変えようと試みる。しかし、Puttermesserは自分が生み出したゴーレムの暴走を阻止できず、楽園創造計画は失敗に終わる。Ozickは1983年のインタビューで、創造者と創造物の曖昧さに惹かれ、それが自身の作品のテーマの一つであると述べているが、本作では両者の関係性が対等であること、つまり両者とも神の創造物（ゴーレム）であることが示唆されている。Puttermesserは芸術家ではないが、本作を芸術家の自虐物語として読むことは可能であろう。Ozickはかつて、作家はゴーレム創造者かと問われたとき、「作家自身がゴーレムだ」と答えている。本作は、自身が神による一創造物であるにもかかわらず、想像力という有限の力で必死に作品を生み出そうともがき続ける作家の滑稽さを描いている。

第五章では、長編 *Heir to the Glimmering World* (2004) における、解釈と想像力の意味、およびテキストとその派生物との関係性について論じる。Ozickの初期作品において想像力は、テキストの持つ「意味」を歪曲し、その伝達を断絶する力、偶像を生み出す力として、その否定的側面に焦点が当てられてきた。しかしながら本作は、解釈や想像力を加えることなくテキストを字義通り受け取り、そのままの形で継承していくことを、非人間的な行為として描いている。そして、テキストから派生したものが、解釈や想像力によって変容し、作り変えられていく過程にこそ、創造性は存在すると示唆している。一方で、派生物がいかに変容しようとも、派生物と先行テキストとの連続性は続いていくことも強調されている。Ozickは本作において、形を変えながらも、先行テキストから生み出されたものを継承し、活用していく手段としての、解釈と想像力の側面を描いている。

第六章では、Ozick自身がJamesの *The Ambassadors* (1903) を作り変えたと言明する最新の長編 *Foreign Bodies* (2010) を扱う。本章では、この二作品を比較しつつ、*The Ambassadors* では重点が置かれなかった「他者」の問題について掘り下げる。本作はJames作品と同様にヨーロッパとアメリカ間のギャップを描いているが、Ozickは、Jamesの19世紀後半から20世紀前半の「洗練のヨーロッパ・無垢のアメリカ」という構図を、「戦争（特にホロコースト）で荒廃したヨーロッパ・1950年代の繁栄のアメリカ」の物語として書き換えると同時に、両大陸に共通して存在する異分子排除の風潮も批判的に描き出している。さらに、本作で描かれる「他者」とは、ユダヤ人差別や難民排除に代表される、社会から排除されたり周縁に追いやられる脆弱な存在であるだけでなく、何物にも取り込まれることがなく自由であるがゆえに、支配者の力が及ばず、支配構造を揺るがす強力な存在でもある。また主人公Beatriceが、崇拜し一体化を求めていた音楽家の夫から離れ、彼の人生にとっての「他者」となると初めて芸術的な音色を生み出したように、偉大な芸術家を崇拜し完全に模倣しようとするのではなく、「他者」であること、つまり独自性を保つことが、芸術活動には必須であると示唆されている。このことは、かつてJamesの崇拜者として創作活動をスタートさせるも、次第にそこから分離し、ユダヤ系作家として独自性を確立していったOzick自身のキャリアを象徴している。OzickはJamesを書き換えることで、Jamesと自身との作風の違いを再認識し

た。本作は、OzickがJamesの崇拝者であることから完全に卒業し、自身の作家としての道のりを肯定する物語として捉えることもできる。

このようにOzickは半世紀以上にわたり、芸術とユダヤ性という独創的なテーマに取り組み、作品を生み出し続けてきた。ユダヤ系文学の最盛期が過ぎた後も、伝統を活用し変容させながら、ユダヤ系文学におけるユダヤ性の保持に貢献してきた彼女の功績は、ユダヤ系文学の流れの中で評価に値する。

論文審査結果の要旨

論文の内容の要旨

本論文は、アメリカ合衆国の作家シンシア・オジック（1928- ）の小説について、ユダヤ人であるという事実と対峙し続けるオジックの姿勢が、彼女の創作活動において一貫して重要な創作動機になっているとの見地に立った上で、第1作から最新作に至るまでのオジックの作品群を包括的に取り扱い、オジックが各作品において独特な提示方法によりユダヤ性を展開してきた足跡を浮き彫りにするものである。

論文は、全文185ページ（本文170ページ、注および引用文献15ページ）、構成は以下の通りである。

| | |
|--------------|---|
| Introduction | |
| Chapter 1 | (Unexpected) Awakening as a Jewish Writer: Conflicts between History and Art in <i>Trust</i> |
| Chapter 2 | “Jewish Writer” as an Oxymoron: Cynthia Ozick’s Self-Confrontation in Story-Making in “Usurpation (Other People’s Stories)” |
| Chapter 3 | Understanding of Fabricating History: The Problem of Writing the Holocaust in <i>The Shawl</i> |
| Chapter 4 | “Writers are Golems”: Artists’ Limited Power of Creation and the Difficulty of Reconstructing the Past in <i>The Puttermesser Papers</i> |
| Chapter 5 | Iconoclastic Forces of Imagination and Interpretation: The Relationship between the Text and its Derivatives in <i>Heir to the Glimmering World</i> |
| Chapter 6 | Independence from the Master: Discovery of “Otherness” as Creativity in <i>Foreign Bodies</i> |
| Conclusion | |
| Notes | |
| Works Cited | |

第一章では、シンシア・オジックの長編小説第1作 *Trust*（1966）について、先行研究に

においてはオジックが自らの修士論文で研究対象としたヘンリー・ジェームズの影響を強く受けた作品とみなされていて、またオジック本人もそれを認めているのだが、本作品には後続の作品群に散見される歴史と芸術の拮抗やホロコーストのテーマがすでに書き込まれている事実気付く。これにより、ヘンリー・ジェームズを師として本作品を書き始めたオジックが、その創作過程においてユダヤ人作家としてのアイデンティティに覚醒した可能性を指摘している。

第二章では、1974年に出版された中編小説“Usurpation (Other People’s Story)”を取り上げ、ユダヤ系アメリカ人批評家ハロルド・ブルームの『影響の不安』(1973)で展開されている理論を援用しながら、既存の作品を書き換える行為によりオリジナリティを獲得できると考える女性主人公のストーリーには、戒律によって偶像崇拝を禁じられているユダヤ人であり、同時に偶像創造を行う小説家であることに対する作者オジックの葛藤が表現されていると論じる。

第三章では、ホロコーストをテーマとして連関する2編の短編“The Shawl”と“Rosa”で構成される*The Shawl* (1989)の解釈を通じて、ホロコーストに関する小説を書くことがホロコーストの事実を歪める危険性を認識する作家が葛藤を抱えながらも書くことの意義について考察される。ホロコーストを書くことについてはテオドール・W・アドルノの「アウシュヴィッツ以後に詩を書くことは野蛮である」(「文化批判と社会」1949)という有名な言葉をはじめとして数多くの議論がなされており、本論文ではそれらの議論を概括的に踏まえた上で、オジックがホロコーストについて書くことへの怖れを拭いきれないながらも、ホロコーストを次世代に語り継ぐことが作家としての使命と捉えていることを論じる。

第四章では、1997年に出版され同一女性を主人公とする5編の短編から成る*The Puttermessa Papers*を取り上げる。“Puttermessa and Xanthippe”では、現代のニューヨークを舞台に、想像力によって自らのエスニシティの確立を試みるユダヤ系第三世代のアメリカ人女性主人公の姿を、ユダヤのゴーレム(土でできている人造人間)伝説を書き換えることによりコミカルに描いている。本作品は、創造力の限界を知りながらも創作を続ける作者自身を自嘲しているものでもあると考察する。

第五章では、2004年出版の*Heir to the Glimmering World*に描かれる解釈と想像力の役割について論じている。本作品では、想像力をユダヤの偶像崇拝禁止の戒律を破る危険な力と捉えていた初期作品におけるオジックの考え方に変化が生じており、想像力およびすでに存在する芸術作品を解釈する行為が人間的な活動として肯定的に描かれていて、他方、芸術家がオリジナリティに固執する姿勢には批判的である点を指摘する。

最後の第六章では、オジック82歳の時に出版された*Foreign Bodies* (2010)が、ヘンリー・ジェームズの長編小説『使者たち』(1903)を書き換えた作品である点について、両作品を比較しながら、本作品がジェームズの『使者たち』ではなくオジックの第1作*Trust*を書き換えたものであり、この書き換えの作業によりオジックが自身の半世紀に渡る創作活動を回顧し、作家としてジェームズとは異なる形の創造力を探求してきた自身の足跡を受容していることを論じる。

論文審査の要旨と結果

審査委員会では本論文に対する主要な評価として次のような意見が出された。

まず、「現代の最も重要な作家の一人」（ニューヨークタイムズ紙2016年6月23日）と称されるほどの作家でありながら日本ではこれまでほとんど研究がなされてこなかったシンシア・オジックの小説について、包括的かつ精緻な研究をまとめ上げたことは大いに評価できる。また秋田氏は、その難解さにおいて定評があるオジックのテクストを丹念に解釈することで、オジックの文学的特徴を明確に論じている上、オジックのほぼ全作品を詳細に分析することにより、オジックが作家として変容し、かつ円熟していく過程を鮮やかに捉えることに成功している。さらに、オジックの各小説を、ユダヤ教徒における芸術の意味という一貫した視点から読み解いた手腕は高く評価できる。加えて、第5章ではユダヤ教徒であってホロコーストの対象から除外されていたカライ派ユダヤ教徒についての言及がなされており、ホロコーストの複雑な側面への論文執筆者の目配りが感じられる。

以上の意見を少々補足すると、シンシア・オジックという作家は、第二次世界大戦後のアメリカで一躍脚光を浴びたソール・ベロー（1915-2005）やバーナード・マラマッド（1914-1986）といったユダヤ系の男性作家から少し遅れて創作活動を開始し、アメリカ文学界では彼らの活躍の陰に隠れていた。しかしながら1960年代アメリカにおける第二派フェミニズムの勃興を経て、1980年代頃から多くのアメリカ人研究者がオジックに着目し、研究成果が次々と発表されるようになった。一方日本では、ベローが1976年にノーベル文学賞を受賞したことも一因となり、ベロー、マラマッド、アイザック・B・シンガー、フィリップ・ロスらの研究が盛んに行われたが、オジックを含めた彼らと同時代のユダヤ系女性作家にはほとんど光が当たらなかった事実がある。従って、本論文は日本で初めての包括的なオジック研究として位置づけられるのである。

審査委員会では、上記の評価に加えて、本論文に対する批判や要求も出された。まず、オジックにはイディッシュ文学（アメリカに移住する以前、主に中欧、東欧に暮らすユダヤ人が日常語として使用していたイディッシュ語による文学）の影響も無視できず、イディッシュ文学の代表的な作家であるアイザック・B・シンガーとオジックの関係について言及がある方が望ましい。また、論文の主眼はユダヤ教の戒律に違反することをめぐる作家の葛藤にあるのだが、本論文の序論において信仰に対するオジック自身の姿勢について十分な解説がなされていないことにより、本論文が浮き彫りにした、作家としての創作活動がオジックをユダヤ性に対峙させ続けている点を不明瞭にしている面がある。また、ホロコーストを書くことに関する議論では、アメリカ社会におけるホロコーストの位置付けについて述べておく必要があるだろう。さらに、オジックの作品をジェンダーの視点から読み解くところまで展開できればオジックとソール・ベローたちとの差異も提示でき、論文としてより一層の厚みを増したはずである。

2019年12月21日に開催された博士論文公開審査会においては、ユダヤ人であることは芸術を犠牲にすることになるのか、オジックが偶像崇拜の問題にこだわる理由は何か、ユダヤ系アメリカ人と表記されるがアメリカ系ユダヤ人という考え方もあるのではないかと、アメリカに暮らすオジックは第二次世界大戦中にも戦場とならなかったアメリカをどのように描いているか、オジックにとっての歴史と芸術はどのように説明されるのか、といった質問がなされたが、秋田氏はどの質問に対しても氏の見解を的確に答えていた。

本論文は、以上のような問題点が指摘されるものの、前述したとおり、文体の難解さやユダヤ教に関する知識を読者に要求するがために日本のアメリカ文学研究者がほとんど取り

組んでこなかったシンシア・オジックの小説について、その特徴を明快に論じること成功しており、今後の日本におけるオジック研究の礎となり、オジックという作家の魅力を広く伝えることが期待できる労作であるとの評価を得た。

以上の審査結果を総合的に判断し、本審査委員会は、秋田万里子氏の論文が博士学位論文に相応しい水準に達しているものと評価し、博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論を全会一致で得たことを報告する。